

「若者自立塾」のいま 就労支援の現場から

効果はどう現れているか？ 運営上の課題は何か？

通学も家事も求職活動もしていない「ニート」。厚生労働省の推計によれば62万人（06年時点）にのぼるとみられ、若干減少傾向にあるとはいえ、2015年には100万人の大台を突破するという予測（第一生命経済研究所）もある。社会保障や経済成長の担い手を育て、また格差拡大を防ぐ観点から、政府は03年6月に「若者自立・挑戦プラン」を策定。プランの一環として、05年6月には「若者自立塾」、06年4月からは「地域若者サポートステーション」を設置して、若年無業者の就労支援対策に積極的に取り組んできた。対策がようやく軌道に乗り始めるなか、その効果はどのように現れ、また、今後の課題はなにか——。全国に25カ所に設置されている自立塾のうち、奈良県宇陀市の「室生館」と鹿児島県指宿市のNPO法人「かごしま青少年自立センター」取材した。



室生館（奈良県宇陀市）



原田秀昭・館長

奈良県

学校法人神須学園「室生館」

受け入れ実績トップ、就職率78%

奈良県北東部の山あいにある宇陀市。近鉄三本松駅から伸びる一本道を、トンボの羽音をききながら登ると、学校法人神須学園「室生館（むろおかん）」が現れる。四方を真つ青な柵田に囲まれる中に、ひっそりと佇む。廃校になった旧室生村立西谷小学校を改造した館内は、どこか懐かしい匂いが立ち込めている。

室生館は、厚生労働省の委託事業としてスタートした若者自立塾の一つ。今年の六月で丸二年を迎えた。塾はいま、七〜九月の三カ月間で、第九期生受け

入れの真つ最中だ。大阪、和歌山、兵庫など近隣する府県のほか、遠くは千葉、宮城から計一四人の生徒が集まっている。全国に三一ある同様の施設中、これまでの受け入れ実績は、トータル一三九人とトップ。卒業率は九〇%、就職率は七八%という評判をききつけ、「とにかく助けてください」と懇願する親御さんからの電話が絶えない。第九期生もまさに、そうして入塾に至ったケースばかりだ。

「大事なものは明日からどうするか」ということ

館長を務める原田秀昭さん（写真）は、教師歴二〇年以上、教頭まで勤め上げた。少林寺拳法の道場も開いており、包容力に満ちた雰囲気でも相談者を包む。入塾を希望する本人、両親に対し、原田館長はあえて、ニート状態に陥つた原因追求をしないという。「未就労になつたきつかけが何かは

本人、家族が一番良く分かっている。藁をもつかむ思いで相談に訪れる家族は、とにかく反省しきりのことが多い。だからもう、私たちが現状を評価する必要はない」と話す。「それより重要なのは、『明日からどうするか・何ができるか』を考えてもらうこと。本人をいかに外へ連れ出し、実際の行動・体験へ誘導するか、その作戦を練る会議こそが相談だ」。

室生館での合宿生活のようすはこうだ。入塾したばかりの「前期」は、生活訓練に重きをおく。規則正しい生活習慣を身につけるため、毎朝六時半に起床。ラジオ体操、館内清掃、犬の散歩などをこなして朝食をとる。配膳・後片付けは当番制。自ら収穫した米や、畑で育てた野菜が食卓を飾る。「戴くものは残さず」——などと、壁に貼られた少林寺拳法の精神を噛みしめる。月曜から金曜までは、九時半からと一三時からの二チームで、週二〇時間の授業がある（図）。授業は、フィギュア制作や絵画（デッサン、レイアウト、塗装など）といった「造形」に加え、土こねから焼成までの「陶芸」、犬の飼育・しつけ・トレーニングの知識を身につける「ドッグシッター（介助犬）訓練」——などで構成している。身体的な自信と勇気を育むため、週二回は「少林寺拳法」の訓練もある。一五時以降は、基本的にフリータイム。決められた場所で喫煙もできるし、

■室生館での基本となる週間予定

時間	日	月	火	水	木	金	土
6:30	起床(自室の掃除)						
7:00	朝食(当番制による配膳準備・後片付け)						
8:00	館内清掃&散歩(周辺散策)						
9:30	フリータイム	造形(フィギュア制作)	資格研修(パソコン)	陶芸講習	造形(フィギュア制作)	資格研修(パソコン)	フリータイム
12:00	昼食(当番制による配膳準備・後片付け)						
13:00	フリータイム	資格研修(危険物)	ドッグシッター	スタッフ講話	資格研修(危険物)	ドッグシッター	フリータイム
15:00			少林寺拳法			少林寺拳法	
18:00	夕食(当番制による配膳準備・後片付け)						
19:00	フリータイム						
23:00	就寝(消灯)						

※上記は「前期」段階の一例。「中期」及び「後期」には、企業研修や外部研修、就職セミナー、キャリアカウンセリングなどのプログラムが加わる。



少林寺拳法の訓練の様子

飼い犬を連れてきてもいい。許可を受ければ外泊・外出も可能だ。束縛がほとんどなくて大丈夫かと心配になるが、これが可能なのはあらかじめ本人と充

分の信頼関係を築いてあるから。このことは、途中退塾が少ない(仮に一時的に自宅に戻るものがあっても、ほぼ必ず戻ってくる)効果ももたらしている。「中期」段階に入ると、授業に資格取得のための特別プログラムが加わってくる。三カ月という短い期間に、表計算やワープロを中心としたパソコン検定、危険物取扱者講習(内種乙種四類)、アーク・ガス溶接や、厚労省認定のYESプログラム(コミュニケーション能力、ビジネスマナーの二講座)——など、各自の関心に

一(の二講座)——など、各自の関心に
 応じた資格の取得をめざす。これを成
 し遂げれば、着実に達成感につながる。
 三カ月の合宿生活も終盤に差しかか
 る「後期」。いよいよ就労自立に向け
 た準備が始まる。まず、個々の能力や
 希望を洗い出す「キャリアアカウンセリ
 ング」を実施。そのうえで、働く感覚
 を取り戻す「労働体験」(三輪素麺で有
 名な奈良県桜井市にある食品工場での
 企業研修など)にも参加する。

また、ハローワークへ出向き、実際に
 仕事探ししてもらおう。「できそう
 なものがない」と、求人票を一枚
 も持たずに帰ってくる塾生は少なく
 ない。だが、キャリアカウンセラーは、
 本人が自覚していない特性も踏まえた

「行動のきつかけになれ
 ばプログラムなんて何で
 もいい」
 こうした一連のプログラムは、他の
 施設からもしばしば見学に来るほど、
 評価が高い。とくに週二回、ドッグト
 レナー養成会社から、訓練士を招い
 て行う「ドッグシッター訓練」は、塾
 生の精神的安定に効果を発揮する。犬
 との触れ合いに塾生の顔は自然とゆる
 む。継続して訓練すれば、次第に指示
 に従うようになる犬の変化を目の当た
 りにすると、仕事に対する持続力も養
 われる。

こうしたプログラムについて、原田
 館長は「他校で不登校や中退になった
 生徒も広く受け入れ、全員卒業をモツ
 トとする大阪技能専門学校(※)で
 培ったノウハウを活かし、試行錯誤し
 ながら考案した」と話す。※岸和田市に
 ある「自動車整備」情報処理「簿記」芸能」の四
 コースをもつ専門学校。
 しかし、原田館長は意外にも、「後にな
 った内容なんて何でも良かったこと
 が分かった」と飄々と語る。「そもそ
 も真面目、真剣で賢い彼らは、このま
 まではいけない、変わりたいと思っ
 ている。でも、そのための行動を起こす

きつかけがない。だから、プログラム
 は彼らが興味を持って外へ踏み出すた
 めの何かを含んでさえいればいい。塾
 へ来てしまえば、後は具体的なアクシ
 ョンが苦手な彼らに、明日からはこれ
 をやろうと誘導する行動指針のよう
 なものを示せばいい」。
 だからこそ、「プログラムを運営する
 スタッフの資質こそ重要」(原田館長)
 ということになる。行動を指示し、そ
 れを評価したがる「教師」ではいけ
 ないし、傾聴・共感するだけの「カウ
 ンセラー」の目線でもダメ。彼ら自身
 の行動を誘導する、いわば教師とカウ
 ンセラーの中間的な存在をめざし、「意識
 して指導する」ことが重要だとい
 う。

就職率78%実現の秘訣とは？

卒業後七割以上を就労させるとい
 う高いハードルが設定されている自立塾
 受託事業。卒業後は派遣会社に登録さ
 せて修了というパターンも少なくない
 中で、室生館が地元の民間企業を中心
 に、七八%という高い就職率を達成し
 ている秘訣は何なのだろうか。

原田館長によれば、それは「自立塾
 の三カ月が総仕上げの期間だから」。
 というのも、同塾では相談の電話から
 入塾に至るまで、おおむね半年から一
 年かけて家庭訪問などを繰り返して、信
 頼関係を築いているというから驚く。

相談は親からの訴えで始まるケースが
 多い。だから、本人を自立塾まで連れ
 出すのに相当な時間がかかる。しかし、
 同塾はその手間を決して惜しまない。
 本人と話すうち、「この人を信じてと
 にかく行ってみよう、やってみよ

う」と思わせればしめたもの。本人に納得して動いてもらえる下地を作っておくことが、自立に向けた一番の近道だからだ。

卒塾生の行き先は、外食店、小売店などの店長候補、事務員、販売員、パティシエ、看護師、出版社、大学の施設管理——など非常に幅広い。自立塾のような活動をもっと広めたいと、自力でNPOを興したケースもある。また、知的障がいや軽い発達障がいのある若者も派遣会社を活用するなどして、必ず就労に結び付けている。入塾希望があれば、五月雨式に入塾させる施設も多いなか、一・四・七・一〇月に入塾を限る室生館方式は、「同期で必ずどこかに就職しよう」という塾生の奮起を促すのに一役買っている。

室生館の廊下には、さまざまな職種の人票がところ狭しと並ぶ。ところが、塾生の多くは「人と出来るだけ会わなくて済む仕事がいい」「黙々とやるデスクワークがしたい」——など、とにかく「地味でバックヤード的な仕事」を希望する傾向がある。だが、キャリアアカウンセラー資格ももつ原田館長は、「いまやりたい仕事」と「特性にあった一生ものの仕事」は違うと説明する。本人の希望を優先しつつも、客観的なツールなどを用いながら、潜在的な能力を探る。そして、将来のライフプランが描ける就労につなげるのが、室生館のやり方だ。

ニートだった若者を受け入れてくれる企業を探すのは難しくないのであるか。原田館長にその秘訣を尋ねると、「学校法人である強みを活かし、無料職業紹介所の資格があるので、求人は

自然と集まりやすい環境にある」と話す。また、「大阪技能専門学校」の弟分的存在にあることで、これまでに培った企業の人脈や卒業生のネットワークをフル活用できる点も強みかもしれない」とも明かす。

しかし、ニートを就労自立に導くうえで本当に苦労するのは、就職させることよりむしろ、いかにその就労を継続させるかだという。例えば卒塾後、契約社員で大手外食チェーンに就職したが口ぐせでよく電話をかけてくる。原田館長は「どうせやめるなら、三カ月より六カ月の方がいいぞ。惜しまれながらやめられるからな」などと、機転の利いたアドバイスで離職をこらえさせる。最近ではようやく店長候補（正社員）にまで成長し、ホッと胸を撫で下ろしている。就職しても何かあると、すぐ泣きついてくる卒塾生は少なくない。



ドッグシッター訓練の様子

い。館長も電話を手放せない日々が続く。

就労継続には、周囲の協力も欠かせない。室生館では月一回、保護者家族会を開いている。卒塾後、自宅に戻った後の生活について、家族サイドの態度も改めてもらうよう指導している。例えば、本人が「仕事をやめたい」と言ってきた時、上司や同僚、室生館に相談するよう伝え、軽はずみに「やめてもいいよ」などと絶対に言わないよう念を押す。また、本人がした約束は必ず守らせる（「責任を取らせる」と、むやみに「頑張つて」と言わないこと——など。自立に向けた歩みを中心させないためにも、周囲も意識して環境を変えることが不可欠だ。

卒塾はその後の長い付き合いの始まり

室生館には、卒塾生がスタッフとして働いている。第二期生で、今は塾生の身回りのことを担当している藪田さんもその一人。今では「塾生にもっとも身近な存在として、迷ったとき・悩んだときに頼れる、良いお兄ちゃん的存在。欠かせないスタッフの一員になっている」（原田館長）。

三カ月の合宿後、就職を決める段になって、「ここで働かせてくれないか」と言い出す若者は案外多い。そんなときは、「いつでも遊びにくればいいじゃないか」と言って送り出すようにしている。そうして働きに出た子は、お盆休みになると実家にも寄らず、同館に帰省してくる。お目当ての一つは、一万平方メートルあるという室生館の運動場で開く、村の盆踊り大会。過疎で

とりやめていたものを復活させた大会で、地元の人も塾生が出す焼き鳥の屋台を楽しみにしている。

室生館を訪れる卒塾生の中には、職場になじみず離職してしまい、「もう一回学ばせてください」と戻ってくるケースもある。現在の事業では再入塾はあり得ないため、室生館では朝夕の食事代・宿泊料（二五〇〇円）だけで快く迎え入れ、再就職に導いている。

どんどん増える塾生のアフターケア——まで手を広げると、負担は増すばかりのはず。しかし原田館長は、「放っておけないでしょう。自立塾出身というのを知られたくないと接触してこなくなる子がいる一方、就職後も私たちの支援を必要としている子もいる。未然にシグナルを察知できれば、離職して元の状態に戻るとは避けられる。彼らが力強く社会にはばたく一助になるなら、どんどん活用して欲しいという思いだ」と言い切る。

支援の範囲は一体どこまで？

取材中、原田館長の携帯には、ひっきりなしに助けを請う電話がかかってきた。ニートの多さでは沖縄に次いで全国二位という奈良県との連携で、室生館は週二回、天理市役所内で個別の相談会（無料）を開いている。一三、一七時までの間に、平均して五人ほどの相談者が訪れる。こうして知り合った相談者には、一切料金を取らず、真摯にアドバイスを続ける。

室生館の入塾資格は「義務教育終了後一年以上経過」し、「一年以上前から現在まで仕事をしていない者」で「原

則三五歳未満の未婚者」かつ「集団生活で改善が見込まれる者」。相談を受けたものの、収入や年齢、障害などの事情で、自立塾に入るのが適当でない(入れない)場合も中にはある。そんな時でも、「困っているのを知った以上、放っておけないでしょう」(原田館長)。

室生館が無料相談会を始めたのは、奈良県からの依頼と、自立塾のPRを

兼ねてのこと。設立当初、日に二〇〇件近くの問い合わせが殺到したが、現在は落ち着きつつある。室生館は一六期に二〇人ずつ定員一杯の塾生を受け入れたものの、七期は一〇人、八期は一四人——と余裕が出始めている。

だが、決して相談数が減ったわけではない。自立塾だけでは手に負えない、難しい案件が増えている。原田館長は、

「まだまだ支援機関の存在さえ知らずに悩んでいるケースは潜在的にたくさんある」とみる。本来ならば、地域若者サポートステーションと若者自立塾などが連携し、「発見」「誘導」「支援」「出口」「アフターケア」——の好循環を生み出せば良いが、そうした意識が互いに希薄なのが現状だ。

「よりいつそう有効な就労支援を

ざして、地域若者サポートステーションで把握した若者を自立塾の支援へ誘導してもらい、反対に就職した若者のアフターケアはサポートステーションで担当してもらうなど、互いに連携した取り組みが必要だ」と感じている。

(調査・解析部 渡辺木綿子)

卒業後、看護師になったAさんのケース

卒業生の一人を訪ねた。最先端の予防医療に重点をおき、最新の施設を整える「恒進會病院(大阪府堺市)」で、六月末からリハビリテーション科の看護師として勤務するAさん(女性・二二歳)だ。



「久しぶりやんか。元氣そうで安心したわ〜」。原田館長が声をかけると、作業に集中していた一人の看護師が顔をあげ、一気に表情がゆるむ。「先生〜」。館長を視線に収めつつAさんが手を振りながら駆け寄ってくる。

Aさんは、准看護師で助産師の資格も持つお母さんようになりたいたと、一念発起して大阪府立の看護学校を卒業した。もともと頑張り屋で生真面目なAさんは、大学の附属病院での研修までは順調に進んだ。だが、研修先は忙しい職場で、研修生は強くなじられる日々が続いた。「私にはできない。そもそも

「久しぶりやんか。元氣そうで安心したわ〜」。原田館長が声をかけると、作業に集中していた一人の看護師が顔をあげ、一気に表情がゆるむ。「先生〜」。館長を視線に収めつつAさんが手を振りながら駆け寄ってくる。

Aさんは、准看護師で助産師の資格も持つお母さんようになりたいたと、一念発起して大阪府立の看護学校を卒業した。もともと頑張り屋で生真面目なAさんは、大学の附属病院での研修までは順調に進んだ。だが、研修先は忙しい職場で、研修生は強くなじられる日々が続いた。「私にはできない。そもそも

「自立とは、他人のことを考えて生きること。己のことだけ考えて生きるというのは、自立ではなく孤立に過ぎない」。前川篤・室生館理事長。著書「敗者復活に賭ける教育」より。

Aさんは、室生館がめざす真の「就労自立」に向けて、着実に歩を進めた。思わず「頑張って！」と言いつづけるのをこらえて、心の中で精一杯のエールを送った。

看護師が向いていなかったのかも……とすっかり自信を失ってしまった。

次第に家から出なくなり、約二年間の未就労状態になった。「何とかなければ……と日々焦りの中にいた。そんな矢先、偶然見つけたホームページで室生館のことを知った。入塾後、プログラムに真剣に取り組んだAさんは、ドッグシッター資格なども取得した。規則正しい生活をし、同じような経験をもち仲間と交流するうちに、徐々にかつての自信と明るさを取り戻していった。

翌日から、今度は責任ある「正社員」(研修期間中)として復帰が決まった。日勤(九〜一七時)と遅番(二二〜二〇時)を繰り返す毎日。一月月はアツという間だった。リハビリテーションの仕事もようやく板につき、Aさんは担当の患者をつけてもらえるまでに成長した。計画書に基づく運動の補助や身の回りの世話をしながら、日々の細かな変化を観察し記録する。ドクターのほか、作業療法士や言語聴覚士などさまざまな医療スタッフと連携し、患者を元の生活に戻す重要な役割を担う。

患者さんから、「おかげで症状が緩和したよ。ありがとう」と言われる瞬間が嬉しい(Aさん)。経験を重ねるうちに、いまは自分の言葉で将来の姿(看護師)が思い描けるようになってきた。

Aさんの働きぶりについて、直属の看護師長は「遅刻は絶対しない。接遇やあいさつも完璧。他の看護師に見習わせたいくらいです。かわいい、宝物のような後輩です!」と語る。あえてこれからの課題をきくと、「業務経験が浅いのでしようがないのですが、患者さんに声を掛けられるとつい話し相手になってあげる優しいAさんだけに、遅くまで残業している姿もみられます。時間内に仕事を終わらせることが難しいようです。働き続けるためには、無理しない業務・時間配分も重要だよとの暖かいメッセージに、Aさんは隣でうん、うんとかきうなずく。

Aさんに給料の使途をきくと、「心配をかけた実家に入りたい。後は……働いていなかった時にご馳走してくれた友達へのお返しと、将来のための貯金に当てたい」と嬉しそうに話してくれた。

「自立とは、他人のことを考えて生きること。己のことだけ考えて生きるというのは、自立ではなく孤立に過ぎない」。前川篤・室生館理事長。著書「敗者復活に賭ける教育」より。

Aさんは、室生館がめざす真の「就労自立」に向けて、着実に歩を進めた。思わず「頑張って！」と言いつづけるのをこらえて、心の中で精一杯のエールを送った。

安心できる「古里」を取り戻したい

鹿児島県

NPO法人「かごしま青少年自立センター」

医学的ケアが必要なケースも入塾を

鹿児島県薩摩半島の南端にある指宿市。温泉など観光の街で知られる同市の空き宿泊施設を活用した「静活館(せいかつかん)」は、厚生労働省が〇五年度から始めた「若者自立塾」の一つ。ニート支援を続けるNPO法人「かごしま青少年自立センター」が〇五年七月から運営をはじめ、学校や社会とうまく折り合えずに悩んできた一八歳から三〇代半ばまでの若者たちが、原則三カ月間の寄宿生活を送りながら、生活訓練や就労体験を行っている。住み慣れた土地と家族から離れ、生活全般のシステムを変えることで負の悪循環を断ち切る同館の自立支援の取り組みを詳報する。



学校・職場でのつまづきや家庭の不安を抱えて立ちすくみ、足が動かない――。静活館の門を叩くのは、概してこうした若者たちだ。精神保健福祉士として長く民間の医療機関に勤め、青少年や障がい者のカウンセリングなどにあたった経験を持つ竹田寿昭・かごしま青少年自立センター長は、彼らの悩みを初期段階ですくい取ると同時にメンタル面の見立ても実施。医学的なケアが必要な場合の対応などを事前に保護者と本人に説明した上で入塾を判断している。

「例えば『メンタルクリニックに通院しているが入塾可能か』などといった相談は結構ある。彼らの受け入れ先は決して多くないから、静活館が門前払いしたら就労体験などの機会に恵まれず、病者としてのアイデンティティしか持たなくなってしまうかねない。だから、面接時に『治療を続けながら』とか『投薬と一緒に』などの話し合いを踏まえて、可能な限り受け入れている」。開塾から今年七月までの二年間で入塾者は一二〇人を数え、うち八六人が巣立っている。男女比はおよそ九

対一で圧倒的に男性が多い。

グループワークで認知の歪みを是正

そんな同塾では現在、三人のスタッフが一八〜三六歳の男性一三人の対応に当たっている。午前中は生活リズムを整えたり体力をつける目的で、グループワークや軽作業にあてる。午後には、個人もしくは数人のグループで就労トレーニングに向く。入塾の時期はそれぞれ違うが、プログラムはいっ入ってきて全員一緒に行く。出身地も鹿児島県内に限らず、九州他県や大阪大阪府などさまざま。

同塾を訪ねた日は、台風五号が九州を直撃した八月二日。大荒れの天候のため、あいにく外でのプログラムは全て中止となったが、館内で行うコミュニケーションの練習には参加させてもらうことができた。ストレッチ運動で身体をほぐしている塾生の輪に加わり、竹田氏の指示の下で一緒にやりとりを交わした。



竹田寿昭・センター長

認知行動療法を用いた生活訓練を実施

「Aくん、なんでもいいから食べ物を買って」と答えると、左隣の人から順にそれが何であるかの簡単な質問をして、徐々に回答を絞っていく。こうした食べ物や人物などの好みを話しあうやりとりを終えると、今度は数日前に入塾した人の生活面での不満を聴き、その改善策を全員で話しあう。そして最後は、二人が前に出て、久しぶりに家族に電話をかける模擬体験を行い、一時間弱のグループ活動が終了した。注目すべきは、一つひとつの応答ごとに竹田氏が「いい質問でした」「よく答えられました」などと応答者を褒め、皆も拍手で称えていたこと。褒められた塾生のはにかんだ笑顔が印象的だった。

ここで用いられていたのは、考えや物事の受け取り方(認知)が行動に及ぼす影響に着目した心理療法の応用で、「生活技能訓練(S・S・T)」と呼ばれるグループワーク。一つひとつ拍子で褒めることで、過去の負の体験から生じている歪んだ認知を消去して修正し、さらに欠落していた認知を新たに学習する。この活動は、自分や他人を肯定する意識と他人との接し方自身につけることに効果的だという。

就労体験の積み重ねが近隣の信頼を

こうした生活訓練を経て、彼らが向かう主な就労体験先は、JA選果場で請け負った野菜の袋詰め作業や混雑時の市内ロータリーでの交通整理、チラ

シ配りなど。当初は静活館のスタッフがハローワークや知人などを頼って探していたが、塾生たちが仕事をしつかりこなすことで信頼を重ね、今では「静活館に頼めば大丈夫」と近隣の会社などから仕事の依頼が舞い込むようになっていっている。

就労体験で得た収入は、すべて働いた塾生が受け取る仕組み。受託した仕事を数人でこなせばアルバイト代は頭割りだし、一人でやれば全額その人の収入になる。結果、順調にトレーニングが進んだ塾生のなかには、月一〇万円を超えるアルバイト代を稼ぐ人もいるとか。同館に入塾するには、食費と居住費合わせて月額六万円（年収四〇〇万円以下の低所得世帯は月額四万円）の利用者負担が必要だが、それを全額アルバイト代で支払う人もいる。

ちなみに、静活館の運営は、利用者の自己負担と厚生労働省からの奨励費で賄われている。自己負担額は他の自立塾の比して安価に設定されているが、それは「もともとの家賃が安いことに加え、原則二人部屋でスタートした」から。とはいえ、人間関係に敏感な若者にとって、二人部屋は「互いに気を遣いすぎるなどの問題が生じたことから、結局、近隣の住宅を借り受けたりして一人部屋が多くなり、赤字運営を余儀なくされている」。九月からは、広くて家賃負担も軽い指宿市内の病院跡地に移転する予定だ。

入塾後二カ月ほどで進路 面接を実施

それでは、こうした就労体験をどのように就職に結びつけていくのだろうか。

竹田氏は、「入塾後二カ月を過ぎた頃にタイミングを見計らい、本人が今後、どこを拠点にどんなことをしていきたいのか、塾生や家族と面接して今後の方向を話しあっていく」と説明する。

具体的な卒業後の進路は、①地元に戻って就職活動をする②指宿に残って就職活動をする③家族に多少の援助を残ってアルバイトを続ける——の三つに大別される。

面接で①か②の道を選んだ人は、通常のトレーニングに加え、残り一カ月で希望に応じてパソコンなどの資格取得講座（費用の半額を自己負担）を受講。その傍ら、キャリアコンサルティングに履歴書や職務経歴書の書き方や面接の受け方といったマナーやノウハウを教わったり、職業情報を提供するなどの支援を受けて、卒業後の就職活動に備える。③を選んだ塾生は、卒業後も近くに居住してトレーニングに加わりつつ、もう少し時間をかけて自立をめざしていくことになる。

卒業後、指宿に残った人たちは、「密に連絡を取り合い、食事時には塾に来てみんなと一緒に過ごしたりしている」とし、地元に戻った人たちも「スタッフが半年、一年などの節目毎に連絡するほか、同時期に過ごした仲間がメール等で頻繁にやりとりしている」という。途中でやむなく退塾した人も含め、比較的、動向把握や相談をしやすい環境にもあるようだ。

期間限定で質の高い取り 組みをめざす

ところで、自立塾では「卒業後半年

程で卒業生の七〇%が就職等の道を見つける」といった目標を課せられる。その一方で、竹田氏によれば「二トとは心の核の部分では『自立したい、自己実現したい、助けて欲しい』と考えているが、家族だけではどうにもならず悪循環に陥ったまま、自分に自信を失うなどして引きこもっている」人で、しかも「引きこもりが長引くと自分の部屋に『王国』を築き、他者と交わりのない『奇妙な安定』から抜け出せなくなる」のだという。ならば、その七割が三カ月の合宿型トレーニングを経て、その後半年で働き口を見つけるのは、端から見れば極めて高いハードルのように映る。

三カ月の入塾期間は短過ぎないのか。それ以前に、自信が持てず人と向き合えない要因は成育歴によって違うはずで、抱える悩みや年齢、入塾時期すら異なる人たちを一緒の合宿型プログラムで行えるものなのか。就職に当たっても、例えば派遣会社に登録するだけで実際に働いていない場合までも「就職できた」とカウントするようなことはないのだろうか。

結論から先に言うと、こうした疑問は全て杞憂に過ぎなかったようだ。まず期限について竹田氏は、「期間の制限なくダラダラやるより、三カ月といった短期間で確実に成果を出す質の高い取り組みが必要だ」と断言する。病院相談室のカウンセリングで「長期に関わりになるのがほとんどで、いくらかの結果はでるにしても、そんなに時間をかけてよいものかと思悩んでいる」過去の経験があるからだ。ただ、前述のように、やや早めに働くことに



慣れてアルバイト代を稼げる人がいれば、卒業後も静活館に残ってトレーニングを続ける人もいるなど、やはり個人差は存在する。このため、三カ月を基本にしたうえで、トレーニング期間にある程度の長短を認めるなどの検討の余地があるかも知れない」とも付け加える。

「古里」が「苦里」になるとき

そして、「何よりも合宿型のプログラムであることが最重要ポイントだ」と強調する。竹田氏によれば、静活館に来る二トの多くは、いじめなどで一代の早い段階に対人関係に苦手意識を持つようになった挙げ句「弱い自分が悪い」と自分を責めたり「もしかしたら自分に原因があるかも知れないのに、横暴な相手を責めて良いのか」などと混乱して引きこもり、①同世代で落ちこぼれたので、とても社会では通用しない②コミュニケーションが下手だから、仕事なんてできっこない③長期間休んでいたの、体力も気力も社会に通用するレベルにない——などと

思い込む傾向があったという。

そして彼らは、「自立や自己実現がしたいが、どうにもならないので誰かに助けて欲しい」と思いつつも本音を言えず、家族に対し「どうせ自分はダメだ」「親の育て方が悪いのだから責任を取れ」などと苦しい言い訳に終始。本人は孤立して社会との接点を失い、家族は「言い訳」に振り回されながらも愛情がある故に自分たちでなんとかしようとして空回りして疲弊する。そうしたら最後、実家の「古里」は苦しい場所ではない、といった悪循環システムができあがってしまうのだという。

一歩踏み出す勇気が大事

説明が長くなってしまったが、竹田氏は「ここに合宿型プログラムが威力を発揮するカギがある」と自信をのぞかせる。「何かにつまずき、傷ついて閉じこもった家庭や古里が『苦里(くるさと)』になったら、もう思い切つて変えてしまわなければならない。本人は一歩踏み出す勇気を持ち、家族も愛する者を送り出す決意をして自立塾に来てもらえばいい」。

だが、ニートは昼夜逆転している人が多く、体力は本人が思うほど下がっていないものの自信は持てず、コミュニケーション不足で聴力が落ちている人も少なくないと聞く。「合宿で変えてしまおう」と一口に言うが、それは決して容易なことではないのでは。

そんな疑問を察するかのように、竹田氏は続けてこう話してくれた。「まずは認知行動療法に基づくグループワークを繰り返し行うことで、徐々に他人と話せるようになり、その積み重ね

が過去のトラウマを払拭し、働くこともできるようになる。次は、決められた時間に仕事先に出勤して決められた仕事をこなす。これ続けるだけで信頼され、賃金を得られる。そうした成体験が本人に充実感をもたらすので、日進月歩で良くなっていく」。

なるほど、確かにそうかも知れない。実際、前述のグループワークに参加した時には、なんとなくではあるが、互いに受容しあう関係の良さを肌で感じることができた。真面目に働けば、その分、手応えも実感できるだろう。

システムチェンジで自立を可能に

「それから、鹿児島市内から離れた場所にあることにも、実は意味がある」ともいう。どういふことかと率直に尋ねたところ、こんな答えが返ってきた。「家族も自立塾に送り出すことで冷静になれるし、他者に問題を委ねられることを知ってほつとするようになる。生活を変えるには、(鹿児島市内に家がある人も少なからずいるので)市内から離れていることが必要だった」。

ここまで話を聞いて、ようやく納得できた。同館のめざす自立支援は、新しいシステムの構築ありき。家族も巻き込んで居心地の悪くなった「苦里」を、本来あるべき安心できる「古里」に戻し、自信を付けた若者がいつでも安心して帰れるようにする取り組みだ。そして、その実現には、三カ月の期限も合宿型プログラムも、近隣他者(社)の協力も、全てが必須アイテムとなる。卒業者の就職達成目標などは、システムが代われば自ずとついてくるものと

捉えている。実際、こうした運営が軌道に乗った結果、「卒業後も静活館に残ってアルバイトしている人も含めれば、状況が改善して働いている人は、七割は優に超えている」のだそうだ。

入塾者の確保が今後の課題に

ならば、静活館に課題がないのかと言えば、もちろんそんなことはない。今後の課題は入塾者の確保。同館の定員二〇人に対し、現状は一三人。「今はこのぐらいが適正人数だが、広い施設に移転後は、より定員に近い受け入れが可能になる」からだ。

定員割れは、塾の知名度が足りないせいなのか。すぐに宣伝不足が頭に浮かんだが、想像とは異なり「期待や関心を持って問い合わせってくる人はいない、内容を説明した上でパンフレットや入塾案内を送っている」とのことだった。なのに「入塾するのはその一割程度に過ぎない」という。その原因は「問い合わせってくる家族の人が、専門学校やアルバイト先なども同時に探している。そして、自立塾もそういった進路先の一つとして本人に打診するので、塾の取り組みが伝わらなければならないことが大きい」。意外にも家族の対応が問題で、しかも「家族内でどう考え、どういった思いで入塾に至らないのかが掴めない」ことも悩みの種になっていた。

やはり、「家族は、学校や仕事の前に自立支援の土台づくりが一番大事だと理解し、それを迷わず自信を持って本人に伝えて欲しい」とし、それには家族、本人と話し合い、今以上に同法人の活

動を伝える必要がある。

そこで、竹田氏は静活館の実績を背景に、厚生労働省がニートの就労支援を目的に全国で進めるサポートステーション事業に応募。今年六月から新たに、就労相談窓口「若者サポートステーション」かごしま静活館」を同塾内に開設した。自立塾への入塾が主眼ではないが、「家族と本人に丁寧な説明ができる場にもなる」と踏んだからだ。

ステーションには、竹田センター長ら三人が常駐。鹿児島市など七市でも、非常勤の若者支援コーディネーターを配置して、それぞれ月一回出張相談を行っている。具体的には、支援対象者の実態把握に務めるとともに、対象者や保護者のカウンセリング、キャリア育成支援、雇用先の掘り起こしなどの取り組みを進める考えだ。職員の一人でキャリアコンサルタントの池元正美氏は、「相談者に対し、精神保健福祉士とキャリアコンサルタントが連携を採ることで、ニートのメンタル面と就労面双方の支援に関わっていきたい」と意欲を見せる。

質の向上とその評価も不可欠

他に、事業規模の拡大に伴い、自立塾の質の向上も課題となりそうだ。「自立塾の発想は行政の大ヒット。今後、サポステの相乗効果の流れを良くしていけば、より多くの支援活動ができる。そうならば、受け入れ先がどれだけ質を高められるかにかかっているし、今はそうといった評価も必要だろう」。

(調査・解析部 新井栄三)